

庄島侍屋敷遺跡

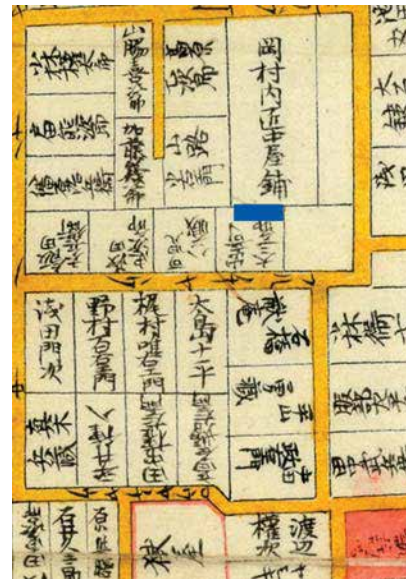
— 第9次発掘調査報告 —



『延寶八年久留米市街圖』
(1680年)



『天保年間久留米城下図』
(1830年～1844年頃)



『安政二年改切絵図』
(1855年)

Shōjima Samurai-yashiki Site

— Report of 9th Survey —

平成26年（2014）1月

久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後川の中流域、筑紫平野の中心に位置し、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査は、久留米城の南側に位置する荘島町で実施しました。その結果、武家屋敷の境界と思われる溝が見つかり、久留米藩のまちづくりが今日の街並みに受け継がれていることが分かりました。また、埴塙などの金属加工に関する道具が出土し、江戸時代のものづくりの一端を垣間見ることができました。この発掘調査の成果が、地域史解明の一助になり、郷土の歴史に対する市民の理解に貢献することを願ってやみません。

なお、今回の発掘調査に際して、医療法人秋吉内科の皆様に多大なご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。

平成26年 1 月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、介護施設建設に先立ち、平成24年度に医療法人秋吉内科の委託を受けて実施した、庄島侍屋敷遺跡第9次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、西と小西富美子、永富敏明、檜原初美、藤木幸子、丸山幸、渡辺しげ子が行い、浄書は当課専任非常勤職員の丸山裕見子が行った。遺物実測図は丸山が作成し、浄書も行った。遺物観察表は、西と丸山の観察を元に丸山が作成した。
4. 遺構写真は、マミヤ RB67を用いて西が撮影した。遺物写真はトヨビュー45GⅡを用いて、当課の塚本映子が撮影した。なお、本文と実測図、観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標位は、世界測地系（新座標系）を基に作成した。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SD－溝状遺構、SE－井戸、SK－土坑を意味する。
7. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号はLSJ－009、調査番号は201249である。
9. 本書の本文執筆と編集は、西が行った。
10. 表紙図版はいずれも抜粋である。また、四角「■」は調査区を示す。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、介護施設新築に伴う事前の発掘調査である。平成24年12月12日、土地所有者の医療法人秋吉内科（理事長：秋吉裕也）から、久留米市荘島町17-67における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である庄島侍屋敷遺跡の範囲内で、試掘調査でも遺構が確認されたため、12月18日に発掘調査が必要である旨を回答した。平成25年1月28日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出された。2月18日、土地所有者と久留米市長榑原則は、庄島侍屋敷遺跡第9次調査の委託契約と協定書を取り交わした。発掘調査は3月4日より開始し、3月19日に終了。その後、5月31日から平成26年1月31日まで、遺物整理と報告書作成を行った。

2. 調査の体制（平成25年度）

調査主体：久留米市教育委員会	教育長：堤 正則
調査総括：市民文化部文化財保護課	部長：野田 秀樹、辻 文孝（平成24年度）
	次長：佐藤 光義
	課長：園井 正隆、古賀 正美（平成24年度）
	課長補佐兼課主査：宮崎 俊一、白木 守
	課長補佐：園井 正隆（平成24年度）
	課主査：白木 守（平成24年度）
	辻 義則（平成24年度）
	事務主査：塚本 映子
	庶務担当：豊福 早苗
	調査担当：西 拓巳
	整理担当：古賀 和子、丸山裕見子
	中里由佳絵（平成24年度）

発掘調査臨時職員（平成24年度）

石井 弘子、大塚ヒロ子、小西富美子、永富 敏明、榑原 初美、原 敏男、藤木 幸子
丸山 幸、由布 幸子、渡辺しげ子（五十音順）

発掘調査整理臨時職員

井上千恵美

3. 調査の目的と経過

本調査は、江戸時代の下級武家屋敷地、特にその屋敷境の把握を目的に発掘した。平成25年3月4日、調査区の表土剥ぎを重機で開始。地表下1.1mで遺構面に到達した。翌日から、作業員を投入して遺構の掘り下げと測量、撮影を開始し、15日に高所作業車で調査区全体を撮影。19日に測量

を完了。同日のうちに調査区の埋め戻しと機材撤収を行い、発掘調査を終えた。

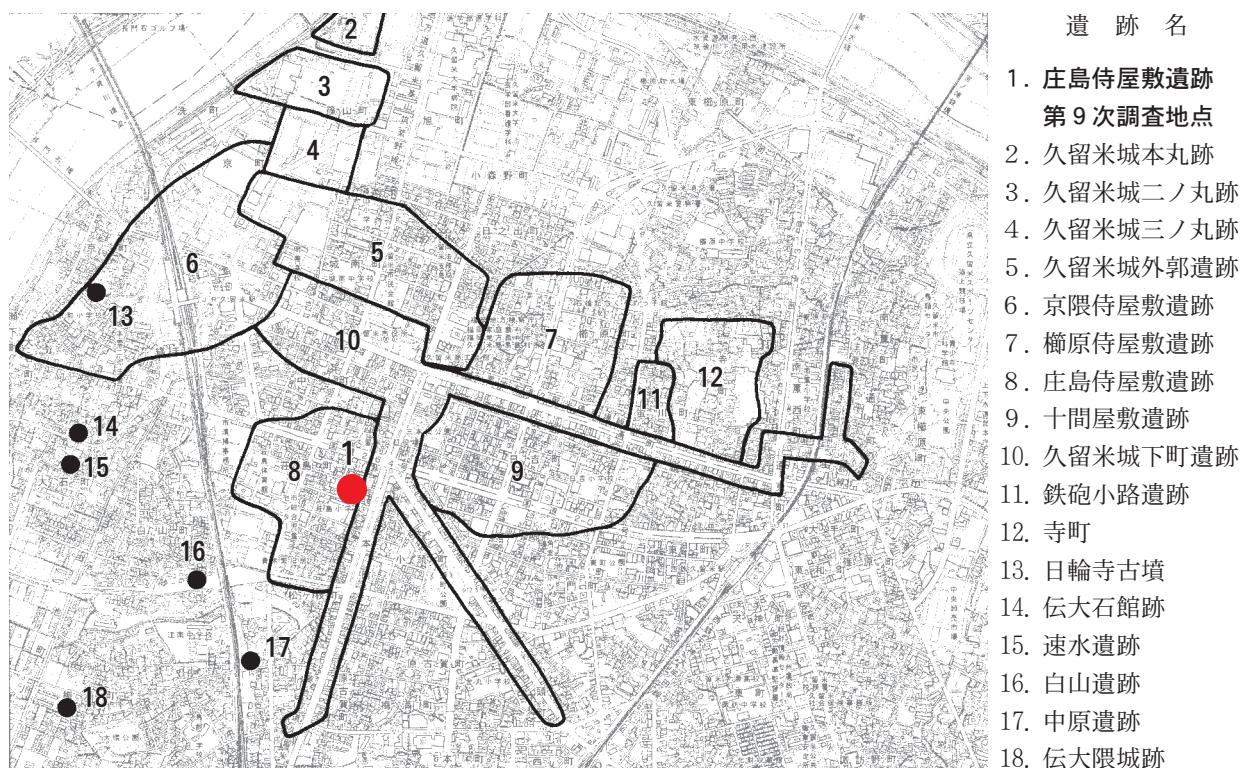
遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん Cubic」で編集・保存した。ただし、土層図の作成は、手測りで行った（1/10）。記録写真は、モノクロ・カラーリバーサルともにマミヤ RB67を用いて6×7判で撮影した。

Ⅱ．位置と環境

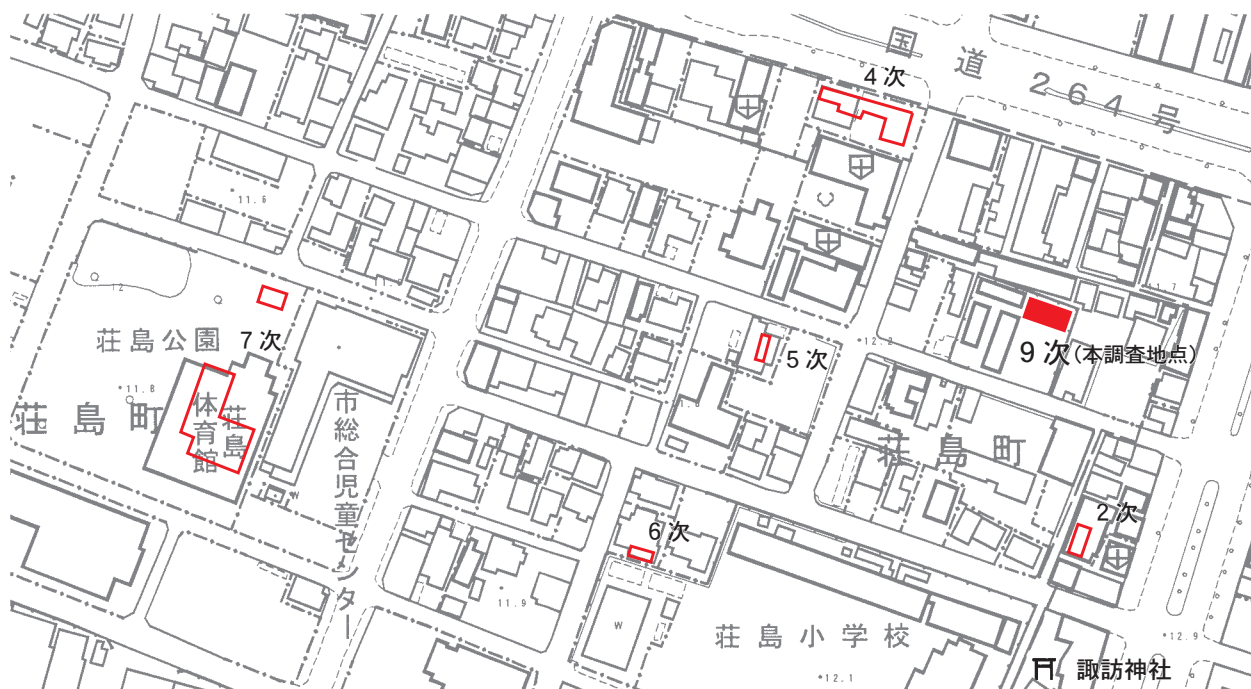
久留米市は筑紫平野の中心部、筑後川の中流域に位置する。筑紫平野をほぼ西へ流れる筑後川は、宝満川と合流して流れを南西へと変えるが、その左岸には、筒川やおこん川などに面して低位段丘がいくつも形成される。庄島侍屋敷遺跡は、久留米城南側にあたる低位段丘の北側に位置する。周囲は南へ緩やかに傾斜し、標高は約12mを測る。

周辺では、久留米城外郭遺跡でナイフ形石器が、中原遺跡で縄文土器が出土しており、速水遺跡、京隈侍屋敷遺跡、久留米城外郭遺跡では弥生時代の遺構や遺物が見られる。6世紀初頭には、前方後円墳である日輪寺古墳が営まれ、速水遺跡では6世紀の掘立柱建物や竪穴住居が検出されている。承平年間（931～938）に成立した『和名類聚抄』には、三潯郡に鳥養郷の名が見える。この鳥養郷の位置だが、鳥飼や取替といった字が残ることから、現在の大石町から梅満町にかけての地域だと推測されている。周辺では、白山遺跡から8世紀の竪穴建物や掘立柱建物が、中原遺跡から同じく8世紀の土坑が検出された。本遺跡でも、近世の遺構に混入して8世紀の須恵器が出土する。

中世には、大石館や大隈城といった城館が築かれた。矢野一貞が著した『筑後将士軍談』には、大石館は大石越前守の館だったという伝承が記されている。大隈城は、大隈左近将監の居城とされ



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形 (1/2,500)

ている。『筑後将士軍談』には、文政7年（1824）に大隈城の東側構口とされる場所から、礎石が3個掘り出されたという記述がある。「庄島」の地名が最初に登場する文献史料は、文禄2年（1593）3月18日の『高良社神職知行注文案』で、高良山座主領として庄島12町の記述が見られる。

関ヶ原の戦い後、筑後国は田中吉政に与えられたが、二代忠政で嫡子が断絶したため田中氏は改易された。元和7年（1621）、代わって丹波福知山から有馬豊氏が筑後国北半に入った。豊氏は城郭の改築と共に、城下町と侍屋敷の整備に着手した。この時、庄島村は外庄島と庄島小路に分けられ、庄島小路には大工や左官などの長屋が建てられたほか、下級武士の屋敷や上級武士の中下屋敷、足輕屋敷が整備された。また城の防備のために、北側には幾つかの寺院が配置された。

本調査地点は、『延寶八年久留米市街図』では大工の長屋が立ち並び（表紙図版参照）、『天保年間久留米城下図』以降の城下図では「フル丁（古丁）」筋に面する山崎家の屋敷にあたる。山崎家は、遠江横須賀で豊氏に召し抱えられた山崎浪之丞の次男である十兵衛、さらにその2代後の又右衛門重春を祖とする（注）。『安政二年改切絵図』では、重春から4代後の大三郎が屋敷の主となっている。大三郎は奥詰を命じられた文化15年（1818）に、参勤交代に伴い江戸へ随行。その後、天保12年（1841）に御台所御目附を勤めたのち、明治5年（1872）に病死している。

明治6年（1873）、町村制施行により荘島町が成立したが、明治22年（1889）に久留米市に編入された。それ以来、荘島町は軽工業を中心とした工場地域として発展したが、昭和20年（1945）8月の久留米空襲では、町の北東部が被災した。今日もなお、荘島町は製靴業などを擁する工業の町であるが、町の大半はマンションや一軒家が建ち並ぶ住宅街へと変貌しつつある。

（注）山崎家に関する記述は、『御家中略系譜』（篠山神社所蔵「篠山神社文庫」267、久留米市立中央図書館所蔵「有馬家文書」3852）に基づく。参考するにあたって、当課の穴井綾香の協力を得た。

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序（第3図）

調査地点の現況は駐車場となっており、地表下0.2mまでバラスが敷かれていた。その下に、橙色砂質土が0.2m堆積する。この層は焼土や炭を大量に含み、煉瓦や被熱した瓦、溶けて変形したガラス瓶などが出土した。これらの遺物は、久留米空襲の際に被災したと思われる。砂質土直下には暗褐色や黒色の粘質土が0.2m堆積するが、煉瓦や樹脂製品などを含むことから、近代以降の整地層だと考えられる。近代の層の下には、暗褐色粘質土が堆積する。炭粒や陶磁器片を含むことから、近世以降の包含層だろう。この包含層直下、標高11.2mに遺構面が広がる。

地山は、標高10.8mより上層は明黄褐色砂質土、下層は黄橙色砂質土である。

2. 検出遺構

近世の溝状遺構5条、井戸2基、土坑15基、ピット多数を検出した。遺構の密度は高く、大半の遺構が重複関係にある。以下、主な遺構について述べる。

溝状遺構

SD1（第4～6、8図）

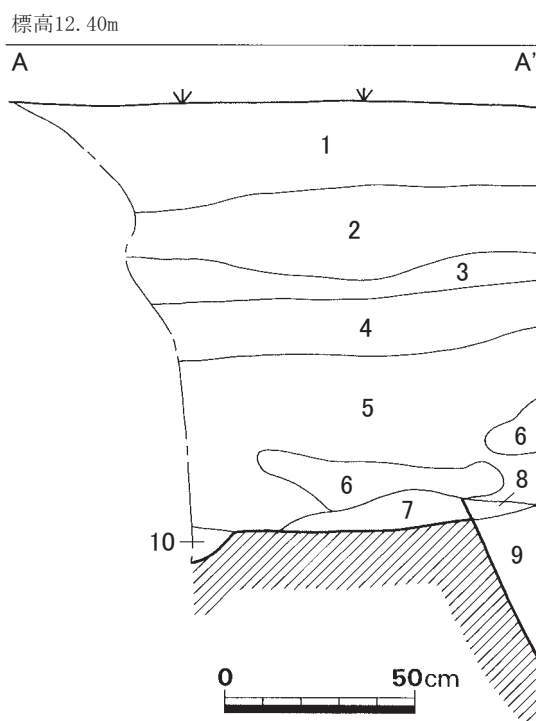
調査区北辺で検出した、北半分が調査区外に及ぶ遺構である。長さ13.3m、最大幅0.6mを測り、深さは最大で1mである。中央部で19世紀中頃の土坑SK48が後出する。埋土は暗褐色粘質土で、下層0.2mは炭粒を含んでいる。出土遺物は、陶磁器や瓦質土器、土師器、鉄釘、煙管の雁首などの金属製品が出土した。

遺物の年代は、17世紀末から19世紀にかけてと幅広いが、大半が18世紀以降の所産である。

SD15（第4～6、8図）

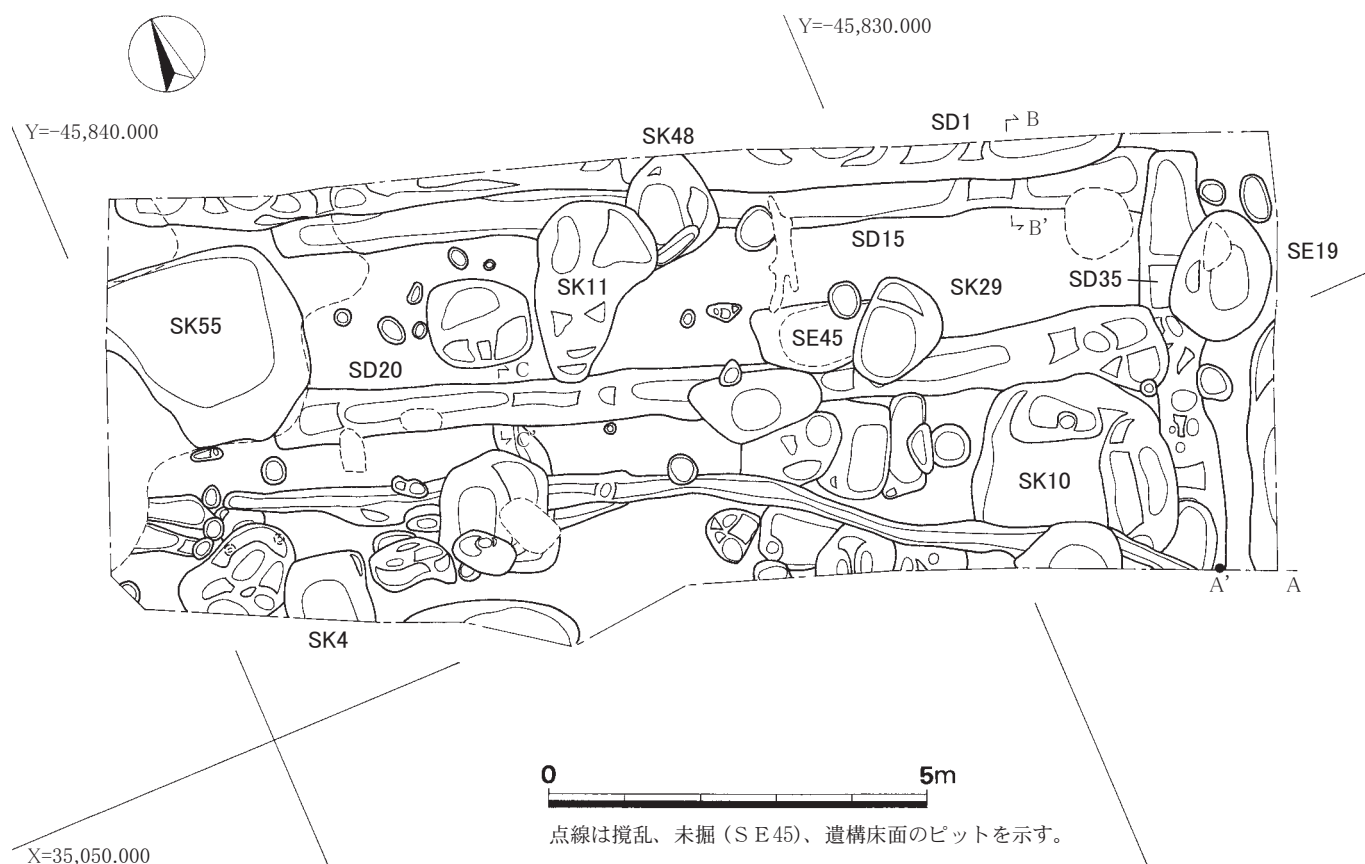
調査区北辺付近で検出した、SD1に先行する溝である。東端はSD35が後出するが、長さ11.6m以上、幅0.9mで、深さは最大で0.5mである。埋土は、上層0.3mは暗褐色粘質土で、下層0.2mは炭粒を含む褐色粘質土である。出土遺物は、近世の陶磁器や土師器、瓦片がほぼ全てだが、8世紀の須恵器坏身の破片も見られた。近世陶磁器の年代は、17世紀後半から18世紀前半に収まる。

SD20（第4～5、8図）



1. 青灰色砂質土。バラスを多く含む（表土）
2. 橙色砂質土。焼土・瓦礫・陶磁器片を多く含む（戦災層）
3. 暗褐色粘質土。砂利・炭粒・瓦礫を多く含む（整地層）
4. 黒色粘質土。砂利・炭粒・瓦礫を多く含む（整地層）
5. 暗褐色粘質土。炭粒・陶磁器片を若干含む（包含層）
6. 暗褐色粘質土。地山ブロック含む（樹根痕）
7. 暗褐色粘質土。橙色ブロックを含む
8. 暗褐色粘質土（SD35）
9. 暗褐色粘質土。炭粒・陶磁器片を含む（SD35）
10. 暗褐色粘質土（土坑埋土）

第3図 調査区南壁東隅土層断面図（1/20）



第4図 庄島侍屋敷遺跡 第9次調査遺構配置図 (1/100)



第5図 庄島侍屋敷遺跡第9次調査区全景 (南西から)

調査区中央で検出した溝である。西端ではSK55が、中央部ではSE45やSK29などの土坑が後出する。長さ11.8m、幅0.6mを測り、深さは最大で0.8mである。方向が異なる個所もあるが、SD1・15に並走し、SD35とほぼ垂直に交わる。埋土は、上層0.25mは明褐色粘質土で、下層は

暗褐色粘質土である。いずれも地山ブロックを含み、特に下層には多く含まれる。遺物は、陶磁器や土師器、瓦片、鉄釘、銭貨が出土した。瓦片の一部は被熱で変色している。銭貨は、いずれも文銭であった。遺物の年代は、17世紀後半から18世紀だが、後出するS K10やS E45の年代から、S D20が埋没したのは18世紀初頭と考えられる。この他、ミニチュア土器（10）が出土したが、古代の所産である可能性を有する。

S D35（第4～5、7図）

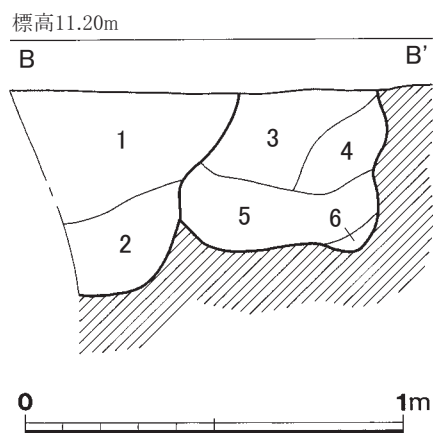
調査区東側で検出した溝である。南端は他の遺構が後出するが、調査区南側へ延びると思われる。長さ5.5m以上、最大幅0.75mで、深さは最大で0.6mである。S D1・15・20とは、ほぼ垂直に交わる。遺物は、陶磁器や土師器、瓦質土器、瓦片、須恵器、金属製品が出土した。金属製品は大半が鉄釘で、20本ほどの釘が固着して一つの塊と化したものもある。土師器や瓦片の一部は被熱して変色する。遺物の年代は、17世紀後半から18世紀前半に収まる。

井戸

S E19（第4～5、9図）

調査区北東で検出した、平面が楕円形の井戸である。長径1.7m、短径1.3m、深さ1mを測る。埋土は、しまりの弱い暗褐色粘質土であった。主な出土遺物は、陶磁器や土師器で、他に金属製品、石製品、木片などがある。他の遺構と比べて金属製品の出土が特に目立ち、埴塼（20～23）や埴塼に転用した陶器碗（17）、銅滓（29）、銅屑も出土した。遺物の年代は、18世紀後半から19世紀初頭に収まる。

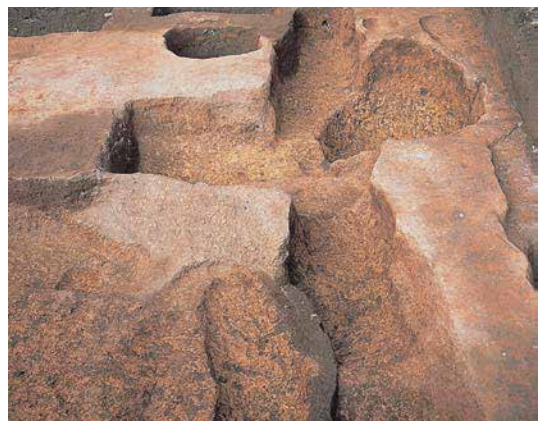
SD1・15



第8図 SD1・15・20土層断面図（1/20）

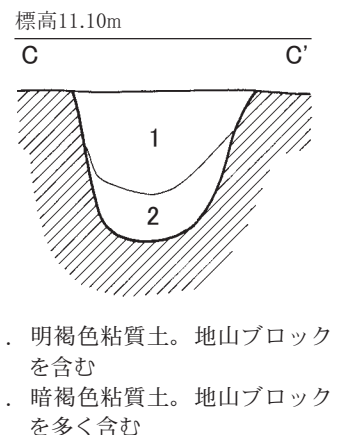


第6図 SD1・15検出状況（南東から）



第7図 SD35完掘状況（南西から）

SD20



SE 45 (第4～5、10図)

調査区中央東寄りで検出した、不定形の井戸である。長径2.1m、短径0.9mを測る。安全上、深さ1.2mまでしか掘削していない。SD 20に後出し、19世紀以降の土坑SK 29に先行する。埋土は、灰オリーブ色粘質土であった。出土遺物には、陶磁器や土師器、瓦質土器、瓦片、金属製品があった。これら遺物の年代は、18世紀後半から19世紀前半に収まる。

土坑**SK 4 (第4～5、11図)**

調査区南西壁際で検出した、隅丸方形と思われる土坑である。調査区南側へ延びるが、長辺長1.2m以上、幅1.1m、深さ1.1mを測る。埋土は暗褐色粘質土が中心だが、炭や焼土を多く含み、火災後の廃棄土坑であることが示唆される。陶磁器や土師器、鉄片、焼成粘土塊、炭化材が出土したが、細片が目立つ。陶磁器の年代は、17世紀後半から18世紀前半に収まる。

SK 10 (第4～5図)

調査区南東で検出した、不定形の土坑である。南側は18世紀後半の溝や、19世紀以降の土坑が後出するが、南北径2.8m以上、東西径2.7m以上、深さ0.5mを測る。掘方から、何度も掘り返されている様子が窺える。出土遺物の大半が陶磁器だが、他に土師器や瓦片、金属製品が出土した。陶磁器には、18世紀前半に焼かれた朝妻焼(36)がある。遺物の年代は17世紀から19世紀まで幅広いが、大半が18世紀に収まる。先行するSD 20・35の年代や、後出する遺構の年代から、18世紀中頃から19世紀初頭の土坑だと思われる。

SK 11 (第4～5図)

調査区中央西寄りで検出した、不定形の土坑である。南北長2.4m、東西長1.6m、深さ最大0.7mを測る。南側には、不明瞭ながら複数の段が見られる。このことから、南側に出入り口を有する穴蔵だと思われる。埋土は暗褐色粘質土で、地山ブロックを含む。出土遺物は、陶磁器や土師器、瓦質土器、瓦片、金属製品があり、18世紀から19世紀にかけての所産である。だが、SD 1に後出する土坑SK 48が先行するため、SK 11が埋没したのは19世紀前半以降だと考えられる。



第9図 SE 19完掘状況 (南東から)



第10図 SE 45検出状況 (南東から)



第11図 SK 4検出状況 (北東から)

S K 55 (第4～5、12図)

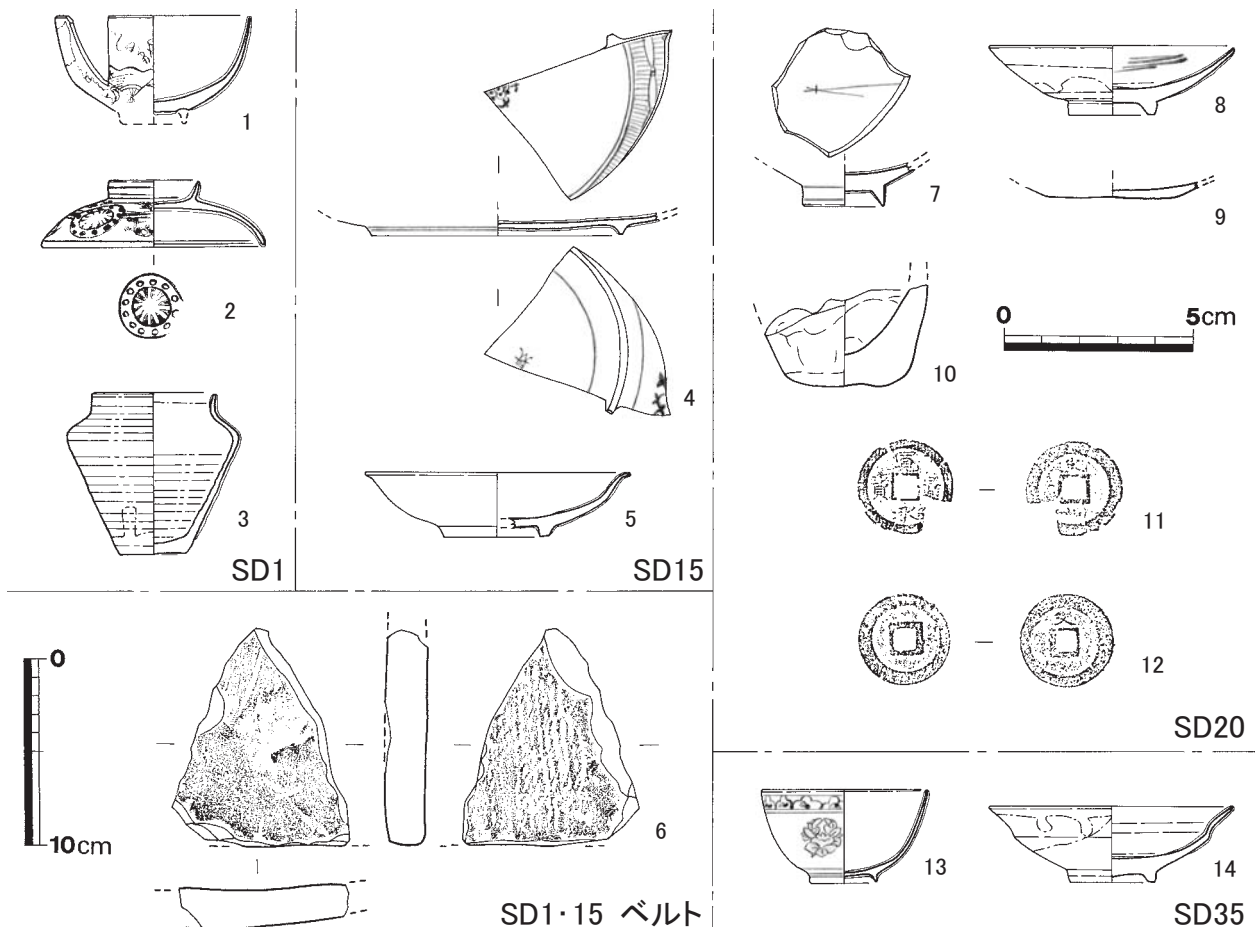
調査区北西隅で検出した不定形の土坑で、現代のゴミ穴の下から検出した。北西隅が調査区外に及ぶが、南北長2.6m、東西長2.7m以上、深さ0.85mを測る。埋土は焼土や炭粒を含む。出土遺物は、陶磁器や土師器、瓦質土器、鉄釘である。一部の遺物は、S E 45出土遺物と接合した。遺物の年代が18世紀後半から19世紀前半に収まるのも、S E 45と同様である。



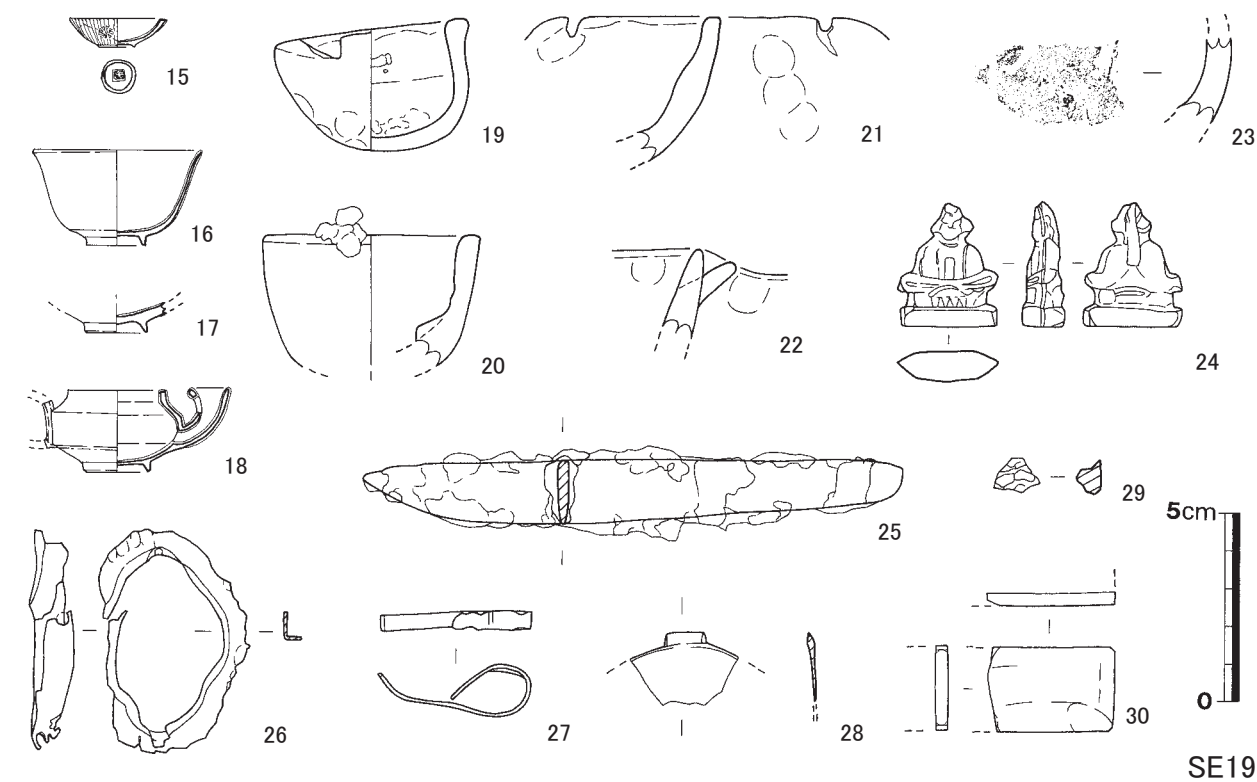
第12図 S K 55検出状況 (南から)

3. 出土遺物 (第13～17図、第1表)

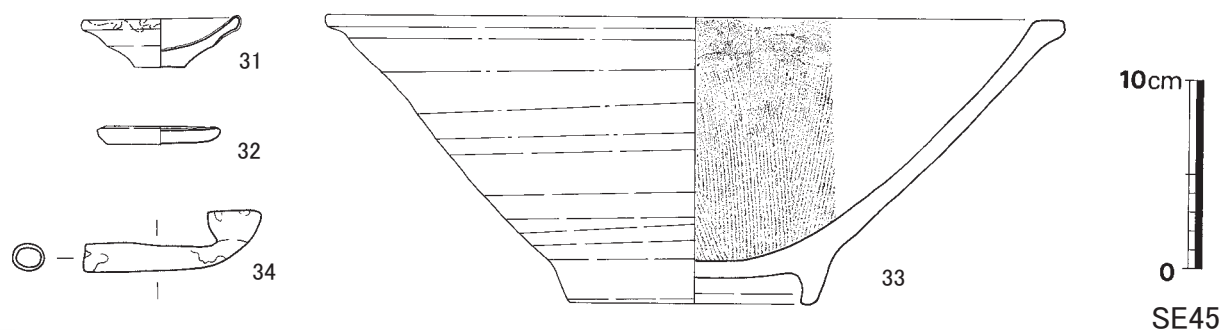
合計で、パンコンテナー7箱分の遺物が出土した。遺物のほとんどが、近世から近代にかけての陶磁器や土師器、瓦片である。この他、須恵器の坏身や甕の細片が近世遺構に混入して出土した。坏身の形状から、須恵器の年代は8世紀と推測される。また、S D 1・15の土層ベルトから出土した古代の瓦(6)は、庄島侍屋敷遺跡で初めて出土したものである。縄目と布目を有することや、さほど湾曲しないことから、平安時代初頭の平瓦だと考えられる。戦災層からは、高台内に統制番号を有する磁器の碗(39・40)や、代用品と思われる磁器鉢(41・42)が出土した。法量や文様などの詳細については、遺物観察表を参照願いたい。



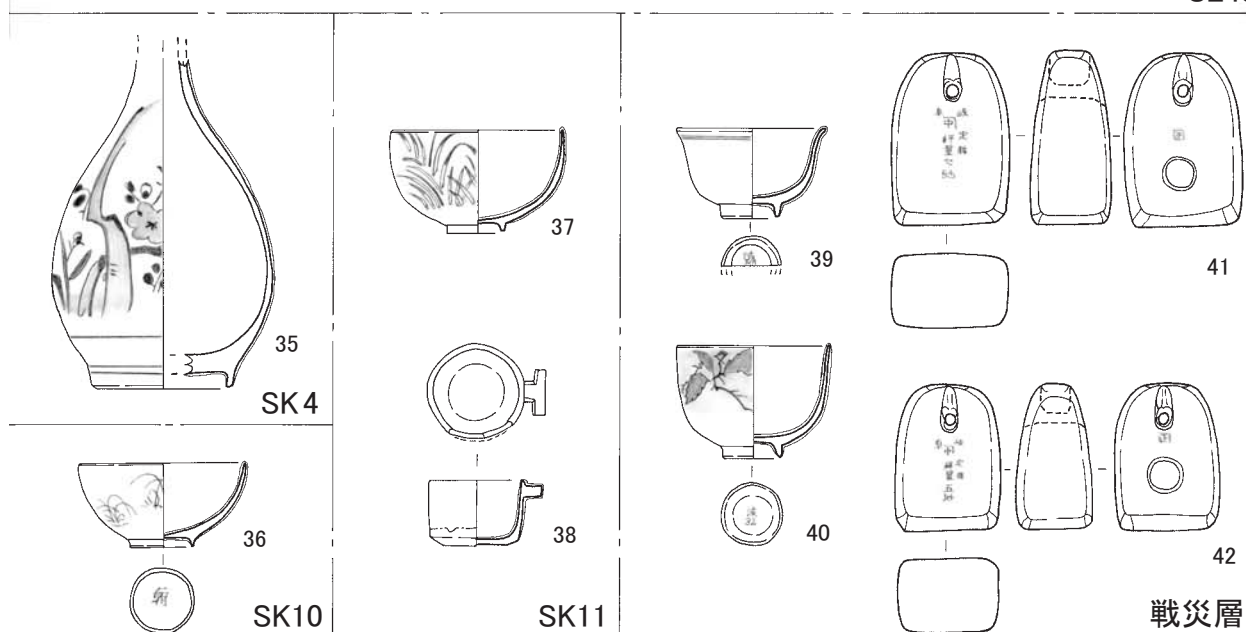
第13図 出土遺物実測図1 (ミニチュア土器・銭貨は1/2、その他は1/4)



SE19



SE45



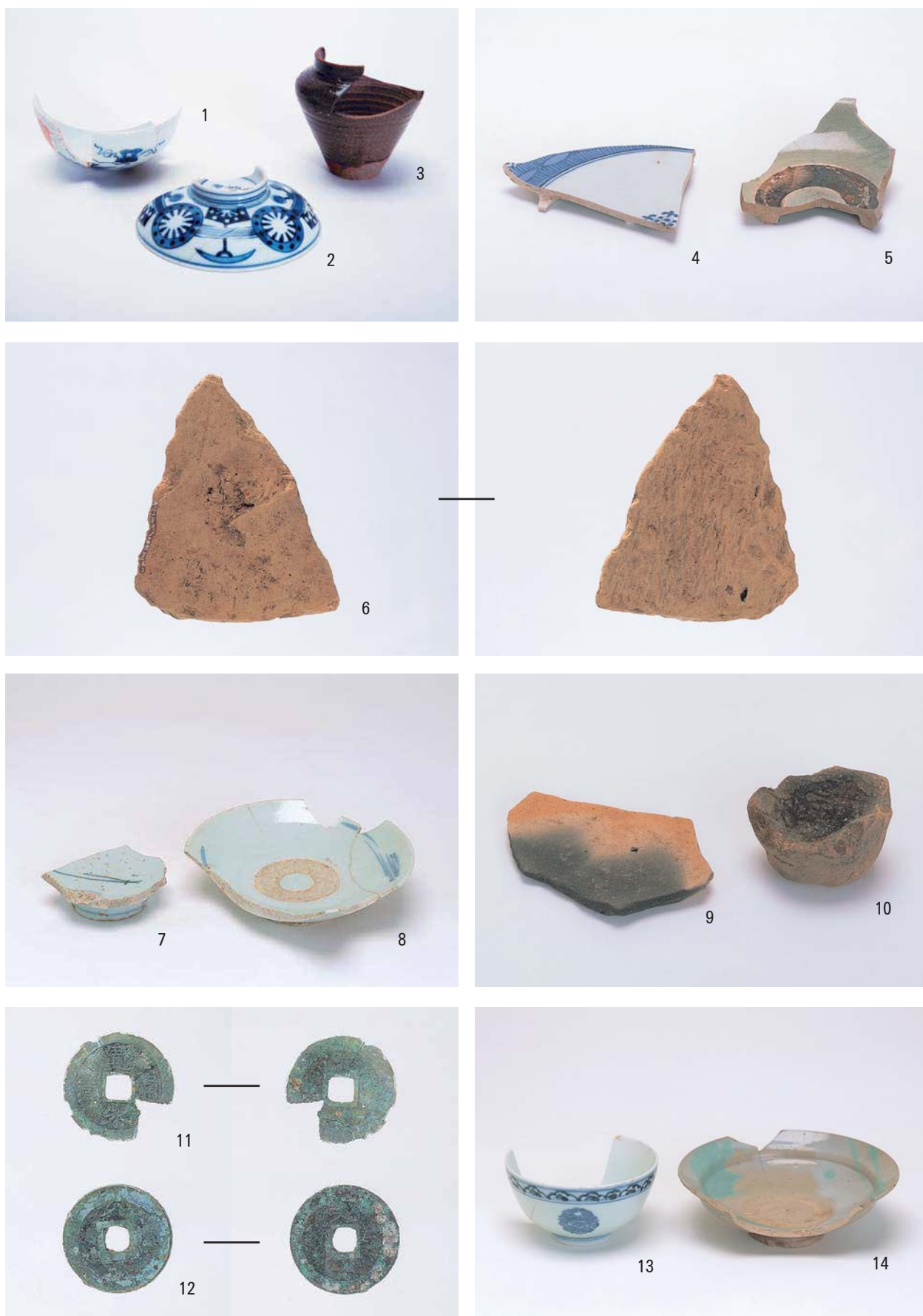
第14図 出土遺物実測図2 (埴塙・人形・金属製品は1/2、その他は1/4)

Ⅲ．調査の記録

第1表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	製作地・胎土	年代・備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)		外面	内面	見込み				
1 第13図	S D 1	磁器	碗	(10.4)	—	(5.2)	染付	扇面・萬 一部露胎				肥前系	18c 前	201249 000020
2 第13図	S D 1	磁器	碗蓋	[11.7]	[4.7]	3.55	染付	二重圈線 丸・幾何	二重圈線	丸	圈線 「太清雍正年製」	肥前系	1820～1860年頃	201249 000001
3 第13図	S D 1	陶器	小壺	[6.6]	3.6	8.6	銅緑釉	ナデ	ナデ	ナデ	糸切り		19c 飴壺または茶壺か	201249 000024
4 第13図	S D 15	磁器	大皿	—	[13.2]	(1.2)	染付	唐草?	連子	五弁花	「・・・製」 ハマ痕	肥前系	18c 前	201249 000043
5 第13図	S D 15	磁器	皿	(14.2)	(5.6)	3.4	青磁			蛇の目 釉剥ぎ	砂付着	波佐見系	1650～1660、蛇の目 釉剥ぎ部は黒変	201249 000044
6 第13図	S D 1・15 ベルト	瓦	平瓦	(11.5)	(9.3)	2.3	—	縄目	布目	—	—	1mm以下の砂粒 を含む	8c 末～9c 初、磨減	201249 000017
7 第13図	S D 20	磁器	碗	—	4.2	(2.4)	染付	—	松葉	—	砂付着	肥前系	1650～1660	201249 000113
8 第13図	S D 20	磁器	皿	(13.0)	4.6	3.7	染付	釉垂れ	流水	蛇の目 釉剥ぎ	露胎	波佐見系	17c 後～18c 前	201249 000115
9 第13図	S D 20	土師器	皿	—	(7.0)	(0.8)	—	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ	精良	内壊土器	201249 000099
10 第13図	S D 20	土製品	ミニチュア 土器	—	3.3	(2.7)	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	1mm以下の砂粒 を含む	古代か、内黒	201249 000124
11 第13図	S D 20	銭貨	寛永通宝	2.5	2.5	0.75/0.1	—	緑青	—	—	—		重量：1.8g 新寛永（文銭）	201249 000125
12 第13図	S D 20	銭貨	寛永通宝	2.4/2.5	2.4/2.5	0.2	—	緑青	—	—	—		重量：4.2g、2枚重なる 1枚は新寛永（文銭）	201249 000126
13 第13図	S D 35	磁器	碗	8.8	3.6	5.0	染付	桐・牡丹 雪輪	呉須付着		呉須付着	肥前系	18c 前、型紙摺り	201249 000137
14 第13図	S D 35	陶器	皿	12.9	4.5	4.05	灰釉 銅緑釉	釉垂れ		蛇の目 釉剥ぎ	露胎 貫入	肥前系	17c 末～18c 後	201249 000128
15 第14図	S E 19	磁器	紅皿	5.2	1.8	1.5	白磁	釉垂れ 菊花印判			印判 「□に吉」		18c～19c	201249 000051
16 第14図	S E 19	陶器	碗	9.1	3.2	5.0	灰釉 銅緑釉			—	露胎		18c～19c	201249 000055
17 第14図	S E 19	陶器	碗	—	(3.4)	(1.6)	不明	銅滓付着	—	銅滓付着	露胎		埴埴に転用	201249 000058
18 第14図	S E 19	陶器	カンテラ	5.2	3.2	4.4	灰釉	釉垂れ	露胎	—	露胎		外面露胎部の一部に 漆付着	201249 000061
19 第14図	S E 19	土製品	埴埴	5.1	3.2	2.8～3.5	—	オサエ 後ナデ	オサエ 後ナデ	オサエ 後ナデ	—	1mm以下の砂粒 を含む	重量：52.1g 内面に銅滓付着	201249 000065
20 第14図	S E 19	土製品	埴埴	(5.8)	—	(3.5)	—	ヨコナデ	不明	—	—	1mmほどの長石 を含む	重量：12.8g 銅滓付着	201249 000070
21 第14図	S E 19	土製品	埴埴	—	—	(3.8)	—	オサエ 後ナデ	オサエ 後ナデ	—	—	1mmほどの長石 を含む	重量：8.7g 銅滓付着	201249 000066
22 第14図	S E 19	土製品	埴埴	—	—	(2.3)	—	オサエ・ ナデ	オサエ・ ナデ	—	—	2mmほどの長石 を多く含む	重量：7.9g、銅滓付着 口縁は一部片口状	201249 000074
23 第14図	S E 19	土製品	埴埴	—	—	(2.3)	—	ナデ	布目	—	—	1mm以下の長石 を含む	重量：10.6g 布目は合わせ目を有する	201249 000069
24 第14図	S E 19	土製品	人形	3.3	2.6	1.1	—	型押し	—	—	型合わせ目	精良 雲母を多く含む	重量：5.6g、天神様	201249 000063
25 第14図	S E 19	鉄製品	刀子	14.2	2.6	0.9	—	—	—	—	—		重量：33.5g	201249 000077
26 第14図	S E 19	銅製品	鍔金具	5.85	(4.0)	0.1	—	穿孔あり	—	—	—		重量：4.7g 折れ曲がる	201249 000081
27 第14図	S E 19	銅製品	金具	4.05	0.5	0.1	—	緑青	—	—	—		重量：1.6g	201249 000084
28 第14図	S E 19	銅製品	金具	(2.85)	(1.9)	0.2	—	緑青	—	—	—		重量：1.7g	201249 000085
29 第14図	S E 19	銅製品	銅滓	1.2	0.9	0.65	—	緑青	—	—	—		重量：1.0g	201249 000086
30 第14図	S E 19	石製品	砥石(硯?)	(6.8)	4.5	(0.7)	—	研磨	—	—	—	泥岩製	重量：46.7g	201249 000085
31 第14図	S E 45	陶器	灯明皿	8.2	2.8	2.5～2.7	鉄釉	ヨコナデ 釉垂れ		被熱	糸切り 露胎		18c	201249 000147
32 第14図	S E 45	陶器	蓋?	[6.6]	[5.6]	0.9	灰釉	ナデ	—	—	糸切り 露胎			201249 000160
33 第14図	S E 45	陶器	挿鉢	39.0	12.6	15.1～15.3	鉛釉	ヨコナデ	挿り目	重ね焼き痕	砂付着		18c 後～19c	201249 000150
34 第14図	S E 45	銅製品	煙管	4.7	1.6	0.1	—	接合痕	—	—	—		重量：4.3g（雁首のみ） 雁首（羅字残る）、18c 後	201249 000153
35 第14図	S K 4	磁器	瓶	—	(7.6)	(17.4)	染付	松竹梅	ヨコナデ 釉垂れ	ヨコナデ			17c 後～18c 前	201249 000029
36 第14図	S K 10	磁器	碗	(9.0)	3.4	4.5	染付	草			「朝」	朝妻焼	18c 前	201249 000030
37 第14図	S K 11	陶器	碗	(9.2)	3.2	5.5	灰釉	草			露胎		18c～19c	201249 000039
38 第14図	S K 11	陶器	餌猪口	5.2	3.4	3.5	灰釉	釉垂れ		釉垂れ	露胎		T字形の把手が付く	201249 000040
39 第14図	戦災層	磁器	碗	(8.0)	(2.7)	4.8	クロム釉 染付	二重圈線			「岐」 三桁の数字	美濃系	1941～1945 国民食器か	201249 000178
40 第14図	戦災層	磁器	碗	8.2	3.0	6.0	染付	秋草			「波」「32」	波佐見系	1941～1945	201249 000186
41 第14図	戦災層	磁器	鍾	9.2	6.3	4.05	染付	ねじ式の栓	—	—	露胎	美濃系	重量：418g、昭和前期「岐阜」 「中7」「定鍾秤量七匁」「正」	201249 000195
42 第14図	戦災層	磁器	鍾	7.8	5.6	3.9	染付	ねじ式の栓	—	—	露胎	美濃系	重量：298g、昭和前期「岐阜」 「中7」「定鍾秤量五匁」「正」	201249 000200

【凡例】〔 〕は復元値を、（ ）は残存値を、— は欠損または該当する部位が無いことを示す。



第15図 出土遺物写真 1

Ⅲ. 調査の記録



第16図 出土遺物写真 2



第17図 出土遺物写真3

IV. 総 括

屋敷境の変遷について

本調査地点周辺は、侍屋敷の区割が今日の土地境界に良好に残る。溝SD1・15・20・35は、現在の土地境界に並走することから、屋敷境の溝であったと考えられる。遺構の重複関係から、まずSD15が掘削され、SD15が埋没した後に、SD35とSD1が掘られる。そしてSD35が埋没してから、SD20が掘削されたと思われる。SD15・20・35は、出土遺物から17世紀後半から18世紀前半までに掘削や埋没が行われており、SD20は一時期SD1と1.3～1.8mの間隔を有して対になっていたと思われる。庄島小路は、元禄9年（1696）の白石火事や享保11年（1726）の田代火事など、何度も火災に見舞われており、その教訓から、屋敷境に火除地を設けたと推測される。

SE19出土の坩堝について

井戸SE19からは、銅製品に加えて、坩堝や銅滓、銅屑などが出土した。遺構の年代から、18世紀後半から19世紀初頭にかけて、この地で金属加工が行われたと推測される。しかし、同時期の本調査地点は侍屋敷の中である。屋敷全域を調査してはいないため、炉などといった遺構の有無は不明だが、侍屋敷内でどのような金属加工が行われていたのだろうか。

今回出土した坩堝は、いずれも外面の被熱は軽微だが、内面は金属滓が付着するものが多い。銅の棹吹の復元実験を行った伊藤幸司氏も、坩堝の外面から加熱しても銅は溶けず、坩堝内部に原料と燃料を一緒に入れて点火し、内部から加熱した可能性が高いと指摘している（注）。

SE19からは銅屑も出土している。共伴した銅製品は、折れ曲がったり欠損したりしたものばかりであった。久留米城下町遺跡第20・22次調査では、坩堝と共に切屑、壊れた煙管などが出土しており、銅製品の材料となった可能性が指摘されている。これと同様に、SE19から出土した銅屑や壊れた銅製品も、金属加工の材料となったのではないだろうか。

これらから、不要になった銅製品を坩堝内で再溶融して、新しい銅製品を作る作業が行われていたと思われる。久留米城下町遺跡でも金属工房と思われる遺構が発見されているが、城下町の金属工房とは別に、細工職人が侍屋敷に出向き、庭先などで作業することもあったのだろう。

（注）伊藤幸司 2011年「得られた情報の解釈と推し量るべきこと」『関西近世考古学研究』19 関西近世考古学研究会

報告書抄録

ふりがな	しょうじまさむらいやしきいせき　－だい9じはつくつちようさほうこく－						
書名	庄島侍屋敷遺跡　－第9次発掘調査報告－						
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第340集						
編著者名	西　拓巳（編）・丸山裕見子						
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課						
所在地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15- 3　　　Tel 0942-30-9225　Fax 0942-30-9715 E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp						
発行年月日	2014（平成26）年1月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　ー　ド		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじまさむらいやしきいせき 庄島侍屋敷遺跡 だい9じちようさ 第9次調査	くるめし 久留米市 しょうじまさまち 荘島町17-67	40203	—	33° 18′ 54″	130° 30′ 27″	2013. 3. 4 ∩ 2013. 3. 19	90㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構		主な遺物		特記事項
庄島侍屋敷遺跡 第9次調査	集落	古代 近世	溝状遺構 井戸 土坑	5条 2基 15基	土師器、近世陶磁器、 土製品、金属製品	近世侍屋敷の境界溝を検出。金属加工関連の遺物が出土。	

要　約			
本調査区は、筑後川左岸の低位段丘上に位置する。現在の境界に平行する溝を数条検出し、前後関係や年代から、侍屋敷の境界の変遷を追うことができた。また、鍔金具や煙管などの銅製品に加え、埴塼や銅滓、銅屑などの金属加工に関する遺物も出土した。これらの遺物は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて、侍屋敷内で金属加工が行われていたことを示す。なお、本遺跡で初めて古代の瓦が出土したほか、8世紀の須恵器が出土した。			

土木工事の届出日	平成25年2月20日	遺物の発見通知日	平成25年3月26日 （24文財第1503号）
----------	------------	----------	----------------------------

庄島侍屋敷遺跡

— 第9次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第340集

平成26年1月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社

〒830-0047 久留米市津福本町2320-15